



## 記憶と忘却の文学論：漱石の圏域

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 正純 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002579">https://doi.org/10.24729/00002579</a>

# 記憶と忘却の文学論——漱石の圏域

山崎 正純

## I 対抗記念碑と記憶

民族がそれぞれの運命を自ら決定すべきだという民族自決論は、フランス革命以降の国民主権概念の広まりとともに定着していく。一九世紀末頃まではヨーロッパとその周辺地域にとどまっていた国民国家の概念は、二〇世紀初頭までの間に、西洋列強による植民地化の脅威にさらされた地域において、国民国家化を目指すナショナリズム運動となつて興隆することになる。特に第一次世界大戦とその後の終戦処理の段階は、普遍的理念として民族自決が国際法の中心に据えられた画期だったといえる。しかし、この民族自決という理念は、「国家としての独立を主張できる民族が国民国家を主張できる」という論理的なトートロジーでもあつて、これを終戦処理の原則としたベルサイユ体制が「勝者による勝者のための国際秩序だ」と批判されることには十分な理由

があつたとみなすべきだろう。つまり、国民国家として自決しようとする権利を認められる民族になるには、先行する国民国家による暗黙の認知が必要とされるのであつて、おそらく国民国家が構造としてその内部に、外部世界から認知されるものとされないものを厳しく峻別する規制を内包させているらしいことも、そうしたことに起因するのではないかと思われる。レイシズムとナショナリズムとが密接不可分なものであることもまた、こうしたことをその遠因の一つとして数える事ができるのではないかと考へる。

おそらく今日、日本を含むすべての国民国家はレイシズム的國家であり、人種的差異、あるいはそれ以上に歴史的・文化的な差異の等価物によつて表象される社会的不平等とそれに起因する紛争をその内部に抱え込んでいる。しかしまた現代の國家は、平等の回復へ向けて、政治的、法的にレイシズムと闘いそれを根絶す

る任務を負っているものであり、レイシズム批判を終わりになき実践として継続しながら、その成果を問われ続けているといえる。具体的には、レイシズムの主体の生成過程を説明する任務が、いま

レイシズムの理論にはもとめられている。レイシズム研究はサバルタン研究からその方法論を学んでいるのだが、サバルタンという術語は、知識人のヘゲモニーのもとに置かれるべき民衆の「徹底した従属性」を指す概念として一九三〇年代のアントニオ・グラムシが獄中で書き残したノートの中に登場した。一九八〇年代にはいつてラナジット・グハラインドの歴史学者が中心となつて立ち上げられたサバルタンスタディーズという学際的プロジェクトの中で、グラムシの業績からのサバルタン概念の継承が行われる。このプロジェクトは国民国家の歴史を支配者の視点から記述してきた実証史学のエリート性との戦いを歴史学、政治学、経済学、社会学などの学際的連携によつて行おうと呼びかけるものだった。プロジェクト・リーダーのグハが提示した「従属性の否定を通じた自律性の獲得」という命題を、レイシズム研究は引き継いでおり、国民国家の排他的構造の内部で愛国的ナショナリズムに従属することが避けられない状況に人間がおかれた時、心理的な地平の裂開や喪失をどのように経験し、その経験から人間がどのように否定の契機を経て主体化するかを、文学作品の内部か

ら論理化することが、文学研究に課された一つの大きな課題だといえるだろう。

二〇世紀から今日に至る世界規模での歴史的経験から私たちが学んだことは、人間存在の主体化の過程の一部に、他者から人間の資格を剥奪し、彼らをこの地上から根絶しようとする、殲滅の思想が介入する可能性があるということであった。主体内部に根を張るそうした欲望への主体的抵抗の実践は容易なことではないはずだ。ジェイムス・ヤングとテッサ・モーリス・スズキの対抗記念碑というアイディアには、人間の主体化の過程で生じる、他者を選別しようとする深い欲望が織り込まれている。人がそれに向き合う時、きわめて個人的な体験によつて刻み込まれた他者嫌悪の痕跡がそこに隠蔽されつつ露呈してしまうという事態に深い羞恥心とともに気づくことになるのだ。

殲滅の思想を反復する人間の主体を文学はどう扱うのか。次に引用する大江健三郎の文章には、自己言及的な愚かしさの反復への恐れと、それへの警告が倫理的な言葉で述べられている。

社会がひとつの事実を忘れさるということは、それを忘れさろうとするあらわな努力が、宣伝の形をつうじておこなわれてはじめて可能になるとみなすべきでしょう。

みんな忘れてしまったのだ、きみひとり記憶している、なんになる？ という臆面もない誘惑の聲が、われわれのまわりをとりまくのを、たびたび感じるではありませんか。また、それを記憶していることは、君自身にとって、都合の悪いことではないのか？ という声が聞こえてくることもあり、それは、より、説得的です。

しかし、われわれが、きわめて孤独な状態においてであれ、自分自身を窮地におとし入れかねない不都合なそれをであれ、絶対に忘れてはならぬ、記憶しつづけねばならぬことがあるはずで、ほくはそれがあると信じます。(中略)

十五年前、この書物に加えられた不当な仕打ちは、もつぱら占領軍にその責を帰すべきことでした。しかし、いま、ここに公刊される体験記を、もしわれわれが再び不当にあつかつてしまうとしたら、その責はすなわち、われわれにあります。

(大江健三郎「なにを記憶し、記憶しつづけるべきか？」<sup>(1)</sup>)

一九五〇年に刊行される予定だった「原爆体験記」がGHQによって刊行差し止めとなったという経緯を踏まえて、その一五年後によく刊行の運びとなったこの「原爆体験記」に大江が寄

せたエッセーの一節である。この中で大江は、知っていることを無かったことにすることが忘却であつて、それは常に社会的な圧力として強制されるが、その同化圧力はしばしば個人にとって抗いがたく、またそれに従うことの安楽さ・心地よさに、われわれは再びあつたことを無かつたことにする、忘却の道を行こうとするのだと警告を発している。

二〇〇九年に刊行された「水死」という小説には、夏目漱石の「こゝろ」が何か所にもわたつて引用されていて、特に「明治の精神」に殉死するという先生の言葉を、上演台本として批判的に演じようとする若い劇団員たちと、地区の教育委員会の職員との対立が描かれるというイデオロギーシユな小説の流れと、それと並行して、敗戦の年に一〇歳だった古義人少年にとつての「時代の精神」が「漱石や乃木將軍の「明治の精神」が比較にならないほどに、「神としての天皇、現人神の精神」だったのやないですか？」という、古義人の父親の水死の理由を熟知しながら、その後の古義人少年の成育を見守り続けていた一老人の言葉が書きつけられることになる。

軍国主義教育もとの古義人少年にとつて、「時代の精神」は、漱石や乃木大將の「明治の精神」が比較にならないほど

に、「神としての天皇、現人神の精神」だったのやないですか？  
（中略）

長江古義人には「時代の精神」として「昭和の精神」が二つあるという考えです。古義人さんが生きた昭和時代の前半、つまり一九四五年までの「昭和の精神」は、それ以後の民主主義の「昭和の精神」がそうであるように、やはりあなたにとって真実やったのやと思います。

前半の「昭和の精神」の申し子の十歳の少年が、尊敬している父親の口から、「現人神の天皇」を特攻機乗りとして訓練された兵士が自爆攻撃する、「人間神を殺す」という作戦の構想が出て来る時、それをたやすく受け入れられると思いますか？古義人少年の意識はそれを聴きとることを拒否したんです。そしてかれの無意識の中に「鞘」から若者が飛行機で飛び立つ訓練をする……話の情景だけが消されずに残ったんです。古義人さん。それがあなたの永年見続けられてる夢の内容ですよ<sup>(2)</sup>。

老年に至り古義人は、永年夢に見続けてきた激流の中を赤革のトランクとともに短艇をこぎ出していく父の姿の意味を、大黃老人の語りによって知ることになる。古義人には昭和時代の前半の

「時代の精神」が記憶の閥の底に沈んでおり、それによって記憶の欠落が生じていたというのである。その欠落部分には、「人間神を殺す」という父の一種の儒教的思想とともに、「敗戦に際して何らかの仕方では天皇が立ち去られることになるならば、前もっての殉死をしておく、そういうこと」として、自ら激流の中にこぎ出した父の自裁としての水死であったという父長江の覚悟も含まれていたはずだと大黃老人は古義人に語るのである。

エッセー「なにを記憶し、記憶しつづけるべきか？」では「われわれ」という言葉で倫理的共同体を信じようとしていた三〇歳の大江が、「水死」においては、戦後民主主義を信じた揺るぎの無い戦後の長い途往きの背後に、まったく気づかれないまま忘れ去られていた記憶を、第三者の語りによって知らされる老小説家として描かれることになる。そして次の「晩年様式集」では、現在地球上に生きる全ての人間が全力を傾けて原状回復に努めても、確実にタイムアウトとなって、未来の人類に大きな負債を背負わせることになるのだという自覚が書きつけられることになる。3・11以後を生きる老作家にとって、彼が生きた戦後の長い時間より、はるかに困難な時間を生きななければならない未来を生きる人間たちの姿が主題化されている。

この放射性物質に汚染された地面を（少なくとも私らが生きて  
きている間は……実際にそういうノンビリした話じゃな  
く、それよりはるかに長い期間）人はもとに戻すことができ  
ない。（中略）われわれのと括ることができれば、それをわ  
れわれの同時代の人間はやってしまった。われわれの生きて  
いる間に恢復させることはできない……

この思いに圧倒されて、私は、衰えた泣き声をあげていた  
のだ<sup>(3)</sup>。

これらの大江の作品からうかがえるものは、人間が個人として  
抱えることになる負の記憶が、個人の成長とともに隠蔽されると  
しても、われわれという一人称複数な主体とするとき、その負の  
記憶は取り返しのつかない無責任さをともなう致命的な行為と  
なってあらわれるのだという洞察だ。その無責任な行為は、端的  
に悪と言うべき行為なのだが、それにもかかわらず人間は、次の  
世代に大きな負債を残すことにきわめて鈍感であり、この鈍感さ  
によって、人間は過去の行いを記念碑として顕彰し、みずから褒  
めたたえることさえあるのだ。

次のテッサ・モーリススズキが引用するジェイムス・ヤング  
の文章とそれへのテッサ自身のコメントは、人間のこのような過

去への鈍感さを無責任な愚行として記憶にとどめ置くためのアイ  
ディアを示唆するものだ。

ヤングの「対抗記念碑」設立の提唱には、石材や鉄鋼は記  
憶を持続できない、という確乎たる思想がその基底にある。  
記念碑に対する、終わりなき、そして移行し続ける未解決の  
論争こそ、記憶を持続させる唯一の方法だ、という思想であ  
る。死者たちへの記憶にかかわる闘争に蔽われた世界で、悼  
む、考える、行動するという困難にかかわり、ヤングは以下  
のように結論している。

「対抗記念碑」の美点とは、その変容しうる性質、ある  
いは社会の記憶、社会自体の記憶の形態に挑戦するといった  
点のみではない。「対抗記念碑」は、歴史的時間に敵対する  
のではなく、歴史的時間と共に遂行を求め、それは、記憶  
が生き続けるのは、概ね、歴史的時間であることを、認知し、  
かつ承認する。記念碑を存続させる行動のなかで、人々と歴  
史的マーカーとの絶えざる交差のなかで、そして記念碑化さ  
れた過去の光の中で、わたしたちがどのような具体的な行動  
を取るのか、という歴史的時間のなかで、記憶は生き続ける。」

(James E. Young, *The Texture of Memory: Holocaust*

*Memorials and Meaning*, New Haven and London, Yale University Press, 1933, p. 48)

(テッサ・モリススズキ「不穏な墓標／「悼み」の政治学と「対抗記念碑」」<sup>(4)</sup>)

対抗記念碑は建立者の意図に反する個人的な怨嗟の声に覆われ、政治性の根拠であるはずの民衆の支持を根底的に失うという事態に立ち至るのである。対抗記念碑の存在によって、記憶は政治と個人的無意識という究極の対立軸を形成しながら、さらに人間の一生より長い時間をくぐり抜け、次の世代にその愚かしい姿をさらすことになる。政治からの反撃は当然予想されるが、政治性の優位が保証されるのは境界線で区切られた限定的な範囲に過ぎない。

崎山政毅は一九三〇年代の日本の総力戦体制を対象に、山之内靖らによって進められたシステム社会論の有効性を批判的に論じる次の文章の中で、地政学上の生存圏の内部にあつては、社会統合の求心力に逆らうことは危険でもあり、またそれに逆らうことに意味を見出すことも難しいが、生存圏・生存空間の周縁部に生きている者にとっては、国民国家中枢からの同化圧力に同調する必要性はまったくないと論じている。

私見では、山之内の社会システム論は、ニクラス・ルーマンあるいはアルベルト・メルリッチのオートポイエティック・システム社会の設定とほぼ同義であろうと思われる。(中略) この概念が要請するものは、分離不可能な相互関係のアンサンブルとして循環的に機能するような、基本的には閉鎖系としてあらわれるシステムである。

総力戦体制に即しているならば、山之内が提起するシステム社会は、中枢の国民国家的(内地)編成に適合的であっても、周辺部(植民地)を含めた帝國的編成の「総体」に適用するには大きな困難がともなうだろう。ピーター・ドウスの用語を借りるならば、「公式帝国」には適合的であっても、「非公式帝国」にまでは敷衍不可能なものととして、山之内の「システム社会論」はある。(中略) 中核に国民国家をおきながら多数・多様で様式を異にするシステム(サブ・システム)が接合し合う、システム混成体として総力戦体制を再考するという試みを私は言いたいのである。

(崎山政毅「『総力戦体制』研究をめぐるいくつかの疑義」<sup>(5)</sup>)

ピーター・ドウスがいう「公式帝国」と「非公式帝国」との空間的な関係は、個人の記憶の現象面を認知する理性の次元と、記

憶を選別排除する無意識の層との垂直の關係とバラレルであると  
いえるだろう。大江のエッセー「なにを記憶し、記憶しつづける  
べきか？」に対して、小説「水死」及び「晩年様式集」が示す変  
化は、人間の倫理性が人間の認識や行為のうち、どこまでをカバー  
するののかという問題についての大江の省察の深まりを示すものと  
いえるだろう。

時代は明治末年に遡るが、明治天皇の逝去に際し各新聞が追悼  
文を掲載した中に、次のようなものがある。弔意を定型的な文章  
で表現した同工異曲の追悼文ばかりが並ぶ中で、清国の日本人居  
留地で発行されていた『天津日報』の追悼文から一部を引用する。

近年隣邦の支那は動搖著しく、我帝国は毎に大義の下に其  
和平を保持するに力めたるも、老大の隣帝国は終に其命脈を  
保つ能はず、人民の輿論は澎湃して終に新共和国を建つる  
に至れり、されど今や正に過渡の時代に属し、其動搖常なら  
ざるは地を隣邦に占むる、我帝国たるもの稍虞ふべきものな  
しとせざらんや、我帝国は支那の保全東洋の平和を図らんが  
為には、先に英国と同盟し仏露等と協約し、更に目下歩を進  
めて露国との協約を堅実たらしめんとするに際し、我 陛下  
の御大事発生せり、我帝国国内に連つては威国勢の發展今の

如く何等顧念するもの無きも、善隣の中華民國動揺今の如く  
邦基未だ完からざるの時に於て、未だ其善良なる解決を見ざ  
るの日に於て、我 陛下の崩御まします豈一片の御遺憾無し  
とせざらんや、神武天皇帝位に樞原宮に即き玉ひてより茲に  
二千五百七十三年、中世以来久しく襲来せし武門の執政全く  
跡を絶ち、帝政古に復り憲政新に成り、その領土に擴古の擴  
張を為して北は樺太の山林より南台湾の海嶼に及び、朝鮮八  
道亦皇光に浴し、滿洲の租借地より支那一帶に於ける居留地、  
その他世界至る所の邦国にも我臣民の在留せざるものなく、  
皇徳の及ぶ処際限無からんとす、

〔天津日報〕社説「敬弔の辞」一九二二年七月三一日（6）

孫文の指導のもとに民主主義の実現を目的とする革命政党中国  
同盟会が誕生、国会開設運動を清朝が弾圧、一九一一年には利権  
回収運動の成果である鉄道敷設権を国有化の名目で地元から奪う  
など、清朝末期の延命政策に湖南、湖北、広東、四川各省で猛反  
対の暴動状態となる。革命派の軍が武昌で蜂起し、革命・独立の  
流れが急速に広がった。清朝は立憲派と帝国主義列強からも見放  
され、一方の革命派は戦術的な失敗に起因する内部分裂によって  
弱体化、清朝が倒れ中華民國臨時政府が成立し、革命派の孫文が

臨時大統領に就任したが指導性を發揮する余地なく、北洋軍閥の首領袁世凱に、共和制支持を条件として大統領のポストを譲ることになる。辛亥革命と呼ばれるここに現われた動乱によって、帝政から共和制へと政体が変わった隣国中国のこの政変のただなかにあつて、明治天皇を失うことの危機感がこの文章には露わである。

日本国内に目を転ずれば、日露講和条約に絡んでの日比谷焼打ち事件、足尾・別子銅山の暴動、赤旗事件、大逆事件、南北正閥問題と、明治維新の動乱をくぐり抜けた支配層の心胆を寒からしむる出来事が打ちつづいている。アメリカの排日運動、伊藤博文の暗殺もこの時期に重なっている。明治末年の日本国内に、こうした社会不安を打ち消す社会統合の中心となるイデオロギーは存在しなかった。啄木のいう「時代閉塞」の状況は、維新以来の統治のエネルギーの衰弱を端的に示すものであつたのである。

つまり『天津日報』のこの追悼文は、明治天皇崩御を悼むスタイルをとりつつ、みずからそのスタイルを裏切る言説によつて、明治天皇の治世とその後日本の途往きの暗澹たる姿を語ってしまうものだと見るができる。「否定を通じた自律性の獲得」という問題意識によつてこれを読むとき、一九三〇年代の日本が、国際関係からの完全な孤立をもつて、世界新秩序の前衛としてのアイデンティティの証左として国民にそれを押しつけ、総動員体

制を官民一体となつて推進した時代の衰弱したりアリズムとは、きわめて対照的で、また健全な批評性を『天津日報』のこの文章にみることもできるのかもしれない。

すなわち次の問題は、人間の主体化のプロセスに、そのアイデンティティを喰ひ破る主体、いわば反主体、さらに言い換えれば「否定を通じた自律性の獲得」の決定的な瞬間を文学はどのような描きとめるのかということになるだろう。

## II 忘却に抗う文学

武田泰淳は戦争中、一兵士として中国大陸へ送られ、また敗戦時には、上海にあつて一国の崩壊と凄まじい価値転換のさまをつぶさに眼前に眺めた。「審判」は帰国した武田泰淳が最初に書き上げた小説である。

私は考えました。自分は少くとも二回は全く不必要な殺人を行った。(中略) しかも無抵抗な老人を殺した。自分は犯罪者だ、裁かるべき人間だ、と。しかし私は平然としている自分に驚かねばなりません。私は自分の罪が絶対に発覚するはずのないことを知っていたからです。伍長は半年ほど前に戦病死しました。地球上で、あの殺人行為を知ってい

るのは私だけなのです。(中略) この行為のただ一つの痕跡、手がかり、この行為から犯罪事件を構成すべき唯一の条件は、私が生きているということだけです。問題は私の中だけにあります(7)。

引用は、語り手の「私」に宛てられた二郎からの手紙の一節である。二郎にとって中国戦線での殺人行為は、その事実をただ一人知っている伍長が死んだことによつて、初めて真に語るべきこととして意味をもち、忘れてはならないこととして刻み込まれた心の在り処をありありと知ることになったという告白がなされている。

次の引用は、九七年に芥川賞を受賞した目取真俊の小説「水滴」の一節である。沖繩殲滅作戦を生き延びた徳正は戦後五十年余りたつて突然右足が大きく腫れあがり、親指の先から水が滴るようになる。寝たきりになった徳正の足指から滴る水滴を求めて毎夜、ひどく傷ついた兵士が列をなして壁から現われ、その水滴を口に含まずには一礼し、また壁に消えて行く。その兵士の中に、徳正がかつて殲滅戦のただなか、壕の中に見捨てて敗走した石嶺という名前の兵士が現われる。

水筒と乾パンを渡し、自分の肩に手を置いたセツの顔が浮かんだ。悲しみとそれ以上の怒りが湧いてきて、セツを死に追いやった連中を打ち殺したかった。同時に、自分の中に、これで石嶺のことを知るものはいない、という安堵の気持ちがあるのを認めずにはおれなかった。(中略) 以来、石嶺のこともセツのことも記憶の底に封じ込めて生きてきたはずだった。(中略) ベッドに寝たまま、五十年余ごまかしてきた記憶と死ぬまで向かい合い続けねばならないことが怖かった。(中略)

唇が離れた。人差し指で軽く口を拭い、立ち上がった石嶺は、十七歳のままだった。正面から見つめる睫の長い目にも、肉の薄い頬にも、朱色の唇にも微笑みが浮かんでいる。ふいに怒りが湧いた。

「この五十年の哀れ、お前分かるか」

石嶺は笑みを浮かべて徳正を見つめるだけだった。起き上がるうともかく徳正に、石嶺は小さくうなずいた。

「ありがとう。やっと渴きがとれたよ」

きれいな標準語でそう言うのと、石嶺は笑みを抑えて敬礼し、深々と頭を下げた(8)。

広島一中の二年生の夏、被爆した経験をもつ。

引用文中のセツという女性は、看護班の女学生で、徳正が瀕死の石嶺を壕に見捨てたことを唯一知る人物だったが、彼女もまた敗走した末に同僚の女子学生五人と手榴弾で自決したことを戦後十年程経って初めて知る。この時以来徳正は酒浸りになり博打にまで手を出すようになる。引用はセツの死を知った彼の苦衷を描いた部分だ。徳正にとっては、石嶺の一件を唯一人知るセツの死を知り、安堵の気持を抱いている自分を見出した瞬間に、石嶺とセツの二人の死の記憶を封じ込めた孤独な心がたちあがってくる。引用の後半では、「この五十年の哀れ、お前わかるか」と徳

正が石嶺に語りかける。徳正の足から滴る水滴でのどの渴きを潤した石嶺の感謝の言葉は、記憶を封じ込めて生きてきた徳正の戦後の苦衷へのいたわりの言葉とも読める。徳正の心に刻まれた二人の死の記憶は、石嶺によってようやく共有され、密封されたまま五十年を経た徳正の心は、死者との通路を得ることで開封されることになる。むしろそれは徳正にとつて奇跡的ともいえる救いとして訪れる瞬間である。

いわゆる原爆文学においても、孤独な密封容器としての心の生成は、作家の描き出す主人公の苦衷の在り処として、極めて重要な描写の焦点となっている。中山士朗「死の影」<sup>⑨</sup>から三つの場面を以下に並べてみよう。著者の中山士朗は一九三〇年生れ。

和夫が頭のなかで想像していた以上の変わりようであった。左右の手の甲のケロイドから、また人々の気の毒がる言葉、人々の和夫を見た瞬間の視線からある程度の醜い変容を覚悟していたが、とてもその比ではなかった。

和夫は、その場で死んでしまいたいと思った。(中略)和夫は、自己の内面で、激しく崩壊する音を聞いたように思った。

グラウンドから、生徒たちのはしゃぐ声が聞こえてきた。和夫は、不意に、孤独感を覚えた。それは、(中略)言葉では表現できない孤独さであった。

これからの自分は、いったいどういふふう生きてゆけばよいのか、和夫は大声で叫びたかった。

「やあ、ケロイドだ。お化けだ」

と囁きたてる幼児の前から、和夫は負け犬のように逃げた。このようにして、外出して不愉快な思いをさせられて家に帰るつど、和夫は、その原因となった好奇心と蔑みに似た視

線を思い出し、地球のありとあらゆる場所に原子爆弾が投下され、人間の顔はすべてケロイドにおおわれてしまえばよい、と願ひ、自分を生かすように努力した人々を呪わないでほしい。られなかつた。

主人公和夫をはじめ登場する生徒たちの多くは、著者が在籍した広島一中の生徒たちであろう。最初の引用は、和夫が顔に大きく残ったケロイドを鏡の中に初めて確認した場面である。この瞬間から和夫の戦後が始まるといつてよいだろう。単なる比喩ではなく、和夫はこの崩れた顔をもつ当事者として戦後の焼け跡に一人立つのだから。その孤独な内面が密封された心が、和夫に重くのしかかってくる。その心が誰にも理解されない密閉容器のように閉じられていることが二つ目の引用に描かれている。孤独な心を抱えたまま生きて行くことへの深い絶望感が和夫の心の内部を一層陰鬱なものにしている。三つ目の引用には、そのような心の内部に現われる人類殲滅への欲望が描かれている。孤独な心の成立と殲滅の思想との関わりを示す一節として注目したい。他者を根こぎにするメンタリテイが和夫のなかに生成してくるこの場面は、原爆投下によって発動した暴力が連鎖する瞬間をとらえたものともいえ、一方でこの暴力性を単独で抑圧し抹消する義務を課

せられた和夫の生きる世界の出口のない閉塞感を描いたものとも言える。

次に引用する、在日韓国人の原爆被害を描いた小説「暗やみの夕顔」の著者金在南キムジエナムは一九三二年生れ、五二年に日本に密航し佐賀県伊万里海岸に漂着。早大露文卒業後、朝鮮高校の教師をしながら、小説の創作をする在日作家である。中山士朗の「死の影」と比較してみれば明らかのように、被爆の事実それ自体が、社会的に認知されない韓国社会における被爆者の孤立感に作品の重心がおかれている。

その時、奥の部屋の襖が開かれ、なにかいざり寄る音がした。日本宅イルギテウが障子を開け、声をかけた。

「英順ア、こつちいらつしやい」  
[ヨンス]

趙英植チョウヨンシクは驚いて中腰になった。あの娘が光の方（月明り）へ向かってきている。わずかな光をも怖れるという娘が、押し入れからすすんで出てくるとは、信じがたかつた。日本宅が娘を抱きしめ縁に座らせたかと思うと、やにわに、その上衣を剥ぎとつた。ああ、趙英植は思わず声をあげた。そしてすぐ眼をそらした。声をあげたのは、雪のように白い、若い女の肌を見てしまったとまどいなのか。それとも、その美し

い肌の背中に赤黒い無残なケロイドの隆起を見た驚きなのか。

「眼をそむけないで下さい。あなた、すっかり見てください！」

日本宅の鋭い声が飛んできた。(中略)

「よく見るんです！ 原爆というものが、どんなものか！」<sup>(10)</sup>

広島で被爆した朝鮮人のこの家族は、父が原爆症で死亡しており、原爆症の母と、重度のケロイドを全身に持つ二六歳の娘(知的障害もあるという設定になっている)の二人。日本の敗戦後、韓国に帰国するが、原爆被害であることが社会的に認知されない限界状況で困窮した生活を強いられている。娘の肌の美しさとケロイドとの対比を月明りの中に見届けた主人公チョヨンシク(若い韓国男性で新聞記者)は、韓国社会に向けて在韓被爆者の認知・援護に向けた特集記事を書くこととするが、上司の無理解に阻まれる。若い娘の肌に浮かぶケロイドに対する低劣な興味を喚起する記事としてなら書いてもよいが、実名に加え住所まで明らかにしろというこの上司の態度は、韓国社会の被爆者差別の一端でしかないであろう。無力な記者でしかない主人公に訴え続ける母の悲痛な叫びを描いたのが引用した場面である。この母娘の社会的孤立は、日本からの帰国者への韓国社会の偏見、原爆被害への

無理解と差別といった重層的な差別構造の中で救いたい状況になっている。この出口のない差別は、いかにも非力なマスコミ人である主人公の記憶に大きな傷として刻み込まれる。石嶺を見殺しにした徳正、無抵抗な中国人を射殺した二郎や、その二郎の手紙によつてその事実を告げられた語り手も含め、このチョヨンシクという名の若い新聞記者と同系統の人物たちだと見ることができる。

次に在日文学の代表的な書き手の一人である金鶴泳のデビュー作「凍える口」から一部を引用する。この作品は、一九六六年九月に文藝賞を受賞した。吃音・両親の不和・父による凄まじい暴力と母の自殺。それら金鶴泳のモチーフのほとんどがこの作品の中に描かれている。

今朝のような、こんな涙ははじめてだった。幼いとき俺はよく泣いたものだが、そのほとんどはおふくろの悲しみを泣いたのであって、俺の悲しみを泣いたのではなかった。俺は、悲しくて泣いたことはあった。だが、寂しくて泣いたことはなかった。寂しくて泣くためには、俺は寂しさに慣れすぎていた。

俺は今夜、正確に言えば明日の早朝に死ぬ。なぜ死ぬのか。

かつてのおふくろの悲しみを思い出し、その悲しみのために死ぬのではむろんない。また、俺の肉体が病菌に侵蝕されているから死ぬというのでもない。俺はただ、俺の寂しさのために死ぬのだ」。

崔の友人であった磯貝は、きわめて重度の吃音と、母親の自殺、父親の暴力等々を背負い自殺する。小説は、自殺した磯貝の遺書が挿入される形式で、武田泰淳の「審判」とともに漱石の「ころ」との類似がこれまで度々論じられてきた作品である。引用したのは、唯一の友人だった在日二世の崔に宛てた遺書の一節である。崔は作品の語りにおいて、大学院生になっている。磯貝と同じく吃音に悩む若者である。しかし、磯貝の吃音と比較すると軽度であるため、磯貝の前ではどまることが無い。磯貝にとっては崔の日本語の流暢さが抑圧の一つの要因になっていた可能性がある。在日であり吃音でもある崔は、磯貝を死から救い得た唯一の人物であったのだが、崔は磯貝の内心の苦衷を理解できないまま、磯貝の訃報を突然知らされる。その遺書は嚴重に封印され、両親を含む遺族の誰ひとりとして中を見ることができない。あきらかに崔だけに宛てられた遺書なのである。読者は崔とともにその遺書を読み、磯貝の死に至る内面の葛藤をつぶさに知ることになる。

なる。崔と磯貝との関係は、「審判」の語り手と二郎との関係に最も近いが、同様に漱石「ころ」の死んだKと先生との関係、さらに先生とその遺書を読む私との関係とも重なっている。とりわけ磯貝の遺書にある「寂しさのために死ぬ」という言葉は、明らかに「ころ」との関連性を示すものだが、重要なことは、「審判」の二郎、「水滴」の徳正、「暗闇の夕顔」の新聞記者チヨヨンシクなど、どの人物造形にも、この寂しさに通じる孤独な心が、明確な罪意識の自覚と同時に、その罪意識を密封する容器として生成しているということだ。そしてその罪意識は、目撃者の不在という状況において最も鋭い刃となって、孤独な心を内側から斬り苛んでおり、その痛覚によって心は一層孤独なものとして閉じられていく。「死の影」の和夫の場合は、罪意識というよりも、内面の崩壊感覚というべき状況に孤独なまま立ち尽くすことによって、人類殲滅の思想へと接続するような剣呑な心を生成させていた。ケロイドを顔に持つことと重度の吃音に悩むことが、一人の青年を心の中の孤独な住人にするのである。

朝日新聞夕刊に二年にわたり連載された後、未完のまま文芸誌『新潮』に場所を移して掲載され二〇〇四年に刊行された柳美里「8月の果て」は、柳美里の祖父イウ Chol と、その弟イウグンの兄弟が長距離走者として走る「すっはすっはすっは」というほ

とんど無限といってよい繰り返しの中から、様々な記憶がよみかえり、また消えて行く、極めて独創的でユニークな構想と文体で描かれた長篇小説である。以下にこの長篇小説から二箇所を引用する。

三十人全員が穴に降りると、コマが両手にリボルバーを握ってわれわれに土をかぶせはじめた。生き埋めだ！われわれを生き埋めにする気だ！（中略）

夢の中で叫んでも叫んでも声を出せないときのようにだつた。

朝鮮民主主義人民共和国万歳！

コツタリが雨根<sup>ウツ</sup>の顔めがけて土を放った。目にも口にも土が入った。雨根は手の根もとで目を拭って荒縄を噛み、土と雨だらけの顔でふたりの査察係を睨みあげた。きさまらはわれわれの死を目撃した。われわれの死は報告されても証言はされないだろう。そして何年かしたらきさまらは口を嚙むだろう。しかし、われわれはきさまを目撃した。死によって口を封じられても、その四つの目にわれわれの六十の目を刻印してやる。

叫び声にこころを囓まれて、雨哲は自分が土砂を手で避ける仕種スッコップをしていることに気づいた。サツプスッコップが見える…ひとりのはコツタリぼ、もうひとりにはコマちび：アイグ 土が目に入った、アイグアヤツいたい！アヤアア、アイグウウウ…チユゴツタだ、と思つた瞬間、弔いの鐘のように頭痛が鳴り響いた。雨哲は痛みによって生きていることを知らされ、眠りによって更新された事実じじつに打ちのめされた。

ナムドンセンおとが殺された。

（略）：おれは夢のなかでナムドンセンの声を聞いた、朝鮮民主主義人民共和国万歳！おれは夢のなかでナムドンセンだつた、生きたまま土をかぶせられ——、アイグ、ナムドンセンは生き埋めにされたのか？ナムドンセンはこの山に埋まつているのか？<sup>(12)</sup>

最初に引用したのはまず弟のウグンが南朝鮮労働党のスパイとして追われ、持ち前の健脚を発揮して山に逃げ込むが、遂に足を撃たれて捉えられ、仲間とともに銃殺、或いは生き埋めにされる場面である。ウグンはここで政府側の手先によって生き埋めにされるのだが、自分のこの死を殺す側として目撃しながらやがて口をつぐむ者たちにむけて、死後「口を封じられても」消えること

無くこの地上に残り続けるという。この引用に続く部分で、土をかぶせられスコップで頭がい骨を割られる瞬間の感覚が克明に描写される。その感覚は殺されるウグンのものに他ならないのだが、それを記述するのはだれなのか。この小説にとってこの描写の主体が何なのかは根本的な問いであり、二つ目の引用によってわかるように、殺されたウグンは殺される現場の記憶をそのまま夢を通じて兄のウチヨルに届けている。つまりウグンは、自分の死の事実を知る者が口をつぐむことを知っており、その故に、死の内部分感覚を死後も兄の生きた身体においてよみがえらせずにはいられないのだ。

ウグンに思いを寄せていた一三歳のキムヨンヒは日本人に騙されて武漢の慰安所に拉致され、ナミコという名で慰安婦として働かされる。十五才で日本の敗戦となつて、故郷のミリヤンに戻る彼女は、プサン行き船の中でウグンの兄のウチヨルと偶然再会し、「あなたはなにひとつ悪くない。悪くないのだから、誰に対しても恥じる必要はない。顔をあげて帰郷できる。私と一緒にミリヤンに帰りましょう」と励まされるのだが、プサンに入港する前夜、誰の目も届かない船の艙から海の中に身を投げる。彼女の投身は同じ船に乗った多くの帰還者の誰にも知られることのない状況で決行されている。その死を語るのは作中に登場する柳美里

自身であり、キムヨンヒの孤独な心は、慕っていたウグンの兄の孫にあたる柳美里の身体のなかに転移し再生していることとなる。実際、小説の末尾近くに、「死後結婚式」という章が設定され、柳美里が複数の巫女とともに祭儀をおこない、彼女の身体にキムヨンヒが降りてくるという場面が描かれる。キムヨンヒの慰安婦としての経験は、家父長制と一体化した儒教社会においては彼女の罪になるのであり、彼女もまたそのことをよくわかつていた。「死後結婚式」を挙行しようと考えた作中の柳美里は、とりわけキムヨンヒの言葉にならない苦衷を朝鮮儒教の空間の外部に解き放とうとしたのだといえるだろう。

作品は自由という叫びによって結ばれる。「審判」の二郎、「水滴」の徳正、「死の影」の和夫、「凍える口」の磯貝と崔、かれらはみな心の中に言葉にならない苦衷を抱え、誰にも知られずそれを心と名付けて生きたのであった。「8月の果て」において、その密封容器のような心というやっかいな代物を開封し、異端審問官の権力の手の届かない空間にそれは解放されている。「水滴」が死者となった石嶺による徳正の戦後の長い苦衷からの解放の物語だったと読めるなら、二〇〇〇年を前後する頃に、国民国家に対する根本的な認識の変化があつた事が推定されるだろう。

### III 漱石「こゝろ」の圏域——結びに代えて

夏目漱石「こゝろ」<sup>13</sup>に度々言及することになった本稿を閉じ  
るにあたって、漱石「こゝろ」の圏域について述べておきたい。

私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた  
義眼のやうに動く能力を失ひました。私は棒立ちに立竦みま  
した。それが疾風の如く私を通過したあとで、私はあゝ、失策  
つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黒い光が、  
私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横わる全生涯を物凄く  
照らしました。さうして私はがた／＼顫へ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出来ませんでした。私  
はずぐ机の上へ置いてある手紙に眼を着けました。それは予  
期通り私の名宛になつてゐました。私は夢中で封を切りまし  
た。然し中には私の予期したやうな事は何もかいてありませ  
んでした。

(下 先生と遺書 四十八)

先生の心の生成が、Kの自殺からではなく、Kの遺書に何も書  
かれていないことをまず確認したその瞬間から始まつたことが、  
右の引用によつて明らかにいえるのではないか、というのが本稿

の推論である。誰にも死の理由をいわずに死んだKは、「8月の  
果て」のキムヨンヒの位置と同じ所にいると考えることもできる。  
一方先生は、Kのように黙つて自殺することもできたはずだが、  
総てを「私」に打ち明け、伝えようとする。遺書の中で先生は「記  
憶して下さい。私はこんなふうにして生きて来たのです。」と「私」  
に懇願するかのやうに語りかけるのだが、それはKの死がその背  
景を含め先生自身を除く誰にも知られないまま決行されてしまつ  
た事からくる一種グロテスクな恐ろしさに先生が全身を貫かれて  
いるからに他ならない。つまりKの死と自分の死を了解可能なフ  
レームの中に収める行為がまず必要になるのだ。

「先生」によつて書かれることになる長大な「遺書」には、K  
の遺体の処理について「さすが軍人の未亡人だけあつて要領を得  
てゐました。」と書かれており、「奥さんに命令されて」遺体の処  
理を行つた自分自身の受動性が強調される。しかし、血潮を拭い  
とり、Kの血を吸いこんで重くなつた蒲団を処理する「先生」の  
両手を染めたであろうKの血液は、「先生」の心に赤い染みとなつ  
て残るであろう。「先生」の心を充たす血液は、自裁したKの流  
した血液だと「先生」が感じたとしても不思議ではない。「先生」  
の「遺書」には、「先生」の心に鋼の用に喰い込んだKの死とい  
う事実が、Kの沈黙によつて一層重い呵責となつて「先生」を押

し潰そうとする苦しみを描かれているように思われる。

なぜKは遺書に何も書かないまま逝ってしまったのか。仮に、「先生」を責める言葉がそこにあつたなら、この小説の展開は全く異なるものになる。「先生」は「奥さん」「お嬢さん」から責められるであろう。警察の取り調べをも避ける事はできないはずだ。社会的制裁は大学での学業の継続にも影を落とすだろう。一切を失つた「先生」は、だがそれにもかかわらず、「遺書」を書くことなく人生を全うしたに違いないと思う。なぜなら罪は十分に罰せられ贖罪は遂げられているのだから。だが、現実はそのはならなかつた。「先生」の犯した行為は「先生」を除く誰にも知られず、沈黙したまま逝つたKを心の中に住まわせたまま、Kへの贖罪を無限に繰り返す地獄の中に「先生」は生きること強いられているのである。

そのような「先生」が「遺書」の中で行つたのは、Kと自分を同じ境遇に置き、同じ苦しみを抱えた心の重みに耐えかねた結果としての、心からの解放というカタストロフの演出だったのでないか。

同時に私はKの死因を繰り返しく考へたのです。(中略)  
現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕

舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひだしました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです。

(下) 先生と遺書 五十三

ここで「Kが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうか」という解釈が提起され、その上に、明治天皇崩御の報に接して、「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました」と書かれることで、「明治の精神」という国民国家のイデオロギーの登場があたかも必然であるかのように描かれ、個人の生と死のもつ個別性を解消し無化する場所としてそれが選択されのだと言える。

漱石にとつて個人の生にはその人間には背負いきれない罪業が刻印されているものであり、それを救済出来るのは国民国家、敢えて言えばその元首の権威性しかないのだと考えられていたとして、それにしてもKと先生の死の理由の極めて個人的な煩悶や苦衷を大文字の国家元首が救うというこの思想は、やはりロジカルに言つて違和感がある。しかしその違和感と遺書を受け取つた

「私」の世代とKや先生との世代を分かち架橋不能な断絶であることを漱石は分かっていたはずだ。なぜなら「心」連載終了後の次の連載小説を『白樺』の若い作家志賀直哉に白羽の矢を立て、懇切な依頼をしたのも漱石その人だったからである。

漱石が「こゝろ」を書いたことよってしかれたルールがやはり厳然としてあり、心の生成のプロセスを後の小説家がそこからまなびつつ、国家と心との関係がさまざま形で描かれてきた。帝国主義の強力な政治の壁に阻まれ、その暴力性に曝されて死んでいった人々の未知の死の数々を、目撃者として描き出し、厚い壁の向こう側からこちら側へと、その死の事実を引き摺り出すこと。本稿はそうした文学の目撃と証言の機能を、現今の政治的理論性によってもたらされる時代の岐路において、確認することを目指したものである。

東アジアの民衆の心の生成を描き、国家イデオロギーの外部にその苦衷に満ちた閉塞感を解放する主人公が描かれるようになった時、それは東アジアの文学にとつて長く望まれ続けた文学の登場として記念されるべきものになるであろう。なぜなら、漱石の依頼に対して、志賀直哉は誠実に執筆の努力を試みた末に、機未だ熟さずと判断し、漱石郎にて執筆辞退の申し出を行って以来、この漱石の宿願は未だ日本の文学史の空白として残り続けている

からだ。日本文学はその意味で、東アジアに対するもつとも大きな負債をいまだ返済していないのである。

## 注

- (1) 大江健三郎「なにを記憶し、記憶しつづけるべきか？」（『原爆体験記』広島市原爆体験記刊行会編 一九六五年八月 朝日新聞社）
- (2) 大江健三郎『水死』（二〇〇九年二月 講談社）
- (3) 大江健三郎『晩年様式集』（二〇一三年一〇月 講談社）
- (4) テッサ・モーリス・スズキ「不穏な墓碑／「悼み」の政治学と「対抗記念碑」」（『批判的想像力のために』二〇一三年二月 平凡社ライブラリー）
- (5) 崎山政毅「『総力戦体制』研究をめぐるいくつかの疑義——システム社会論の視座からの総力戦体制分析に関して」（『レヴィジョン』第1輯 一九九八年六月）
- (6) 清国日本人居留地で発行された日本語新聞。引用は『挙国哀悼録』（一九一二年九月 日本書院）に拠る。
- (7) 武田泰淳「審判」（『批評』一九四七年四月号）
- (8) 目取真俊「水滴」（『文学界』一九九七年四月号）
- (9) 中山士朗「死の影」（『南北』一九六七年一〇月号）
- (10) 金在南「暗やみの夕顔」（『民涛』一九八九年六月号）
- (11) 金鶴泳「凍える口」（『文藝』一九六六年一月号）
- (12) 柳美里「8月の果て」（二〇〇四年八月 新潮社）
- (13) 夏目漱石「心」（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』一九一四年四月二〇日、八月一日連載、「こゝろ」一九一四年九月 岩波

書店)

付記

本稿は日本近代文学会2014年度秋季大会(二〇月一八日 於広島大学)で開催されたシンポジウム「特集 問い直す〈愛国〉」での報告をもとにしている。パネリストの小熊英二氏、内藤千珠子氏、ディスカッションの竹内栄美子氏、並びにシンポジウムを企画された運営委員会、広島大学の有元伸子氏、また当日の質疑を通じて多くの示唆いただいた方々に深く感謝申し上げます。

(やまさき まさずみ・本学教授)